

大多喜の地元力発見／序破急

「破」 天賞文庫

藩侯御前で論語を

講じた天賞堂創業者

学が許された。11歳で8代藩主の松平正和の御前で論語を講じる名譽

なってしまう。官軍との攻防に正多喜で着手した。質は無条件降伏し、城下の佇まいは壊されずに残っている。正質は松平姓も返上し大河内姓となった。断髪令を受けて丁髷(ちよんまげ)を切り落とし旧藩士にも奨励したりした。ちなみに理研の所長となった大河内正敏は、正質の長となつた。

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大大学院工学研究科准教授(金属疲労専攻)。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洗楓座」代表。一般財団法人「エコミュージアムいすみ」代表。

東京銀座に天賞堂がある。筆者が記憶する話題は、10年ほど前に強盗に、高額の金品を奪取されたという事件である。このように天賞堂は貴金属や時計の老舗として有名であるが、もう一つ鉄道模型の展示販売もあり、その店舗には筆者も立ち寄ったことがある。天賞堂の創業者は、本コラムで取り

学問好きの金五郎は、当時ベストセラ―となつた『西国立志編』と判断。27歳の金五郎は、大喜の商売は弟に任せ、自己資金5000円と母方から5000円、合計10000円をもって、東京へ乗

この遺志に従い、2代目金五郎から大多喜町に図書館が贈られた。明治30年(1897年)10月と名付けられた。2階建ての煉瓦造りのモダンな図書館で、千葉県最初の公立図書館であった。

遺志継いだ2代目

町に図書館を贈る

「破」として、その人の話題を紹介したい。

1878年、日本橋植物町(現の八重洲1丁目・日本橋2丁目)に、出版業「江澤書房」を開業した。翌年に銀座尾張

の訳者の中村敏字であるというし、看板の揮毫は勝海舟であったという。金五郎は、彼のビジネス戦略、新規発想力、そして気風の良さを感じていた。郷土の大多喜に愛着も強く、子どもたちに読書

の遺志に従い、2代目金五郎から大多喜町に図書館が贈られた。明治30年(1897年)10月と名付けられた。2階建ての煉瓦造りのモダンな図書館で、千葉県最初の公立図書館であった。

後に天賞堂を創業した江澤金五郎は、嘉永5年(1852年)4月3日(3日)に上総の国、大多喜城下で呉服や雑貨商を代々営む恵比寿屋半右衛門の4男として誕生した(6代目当主になる)。大多喜藩に

日に、大磯での海水浴は、藩校「明善堂」があり藩士の子弟に、和漢字や蘭学ほかに武道を教えていたが、幕末には商人の己の意に従はしむるの権なし、然るで、鉄棒から手をす

運営したという。残念ながら関東大震災で崩壊していたが、平成元年(1989年)に、鉄筋コンクリート建ての現在の図書館「大多喜図書館天賞文庫」が再建された。同館に入ると、左手に若き実業家・江澤金五郎の肖像画Ⅱ写真Ⅱ

地元力発見!

34

佐藤建吉 「洗楓座」代表

して、成就の賜を受くまいった。45歳で「よし」とあり、これに由大事な実業家、商人、来た。その『天賞堂』かつ文芸家をつつたのの命名者は、『立志編』であった。事業は、弟



江澤金五郎の肖像画Ⅱ写真Ⅱが掲げられている。